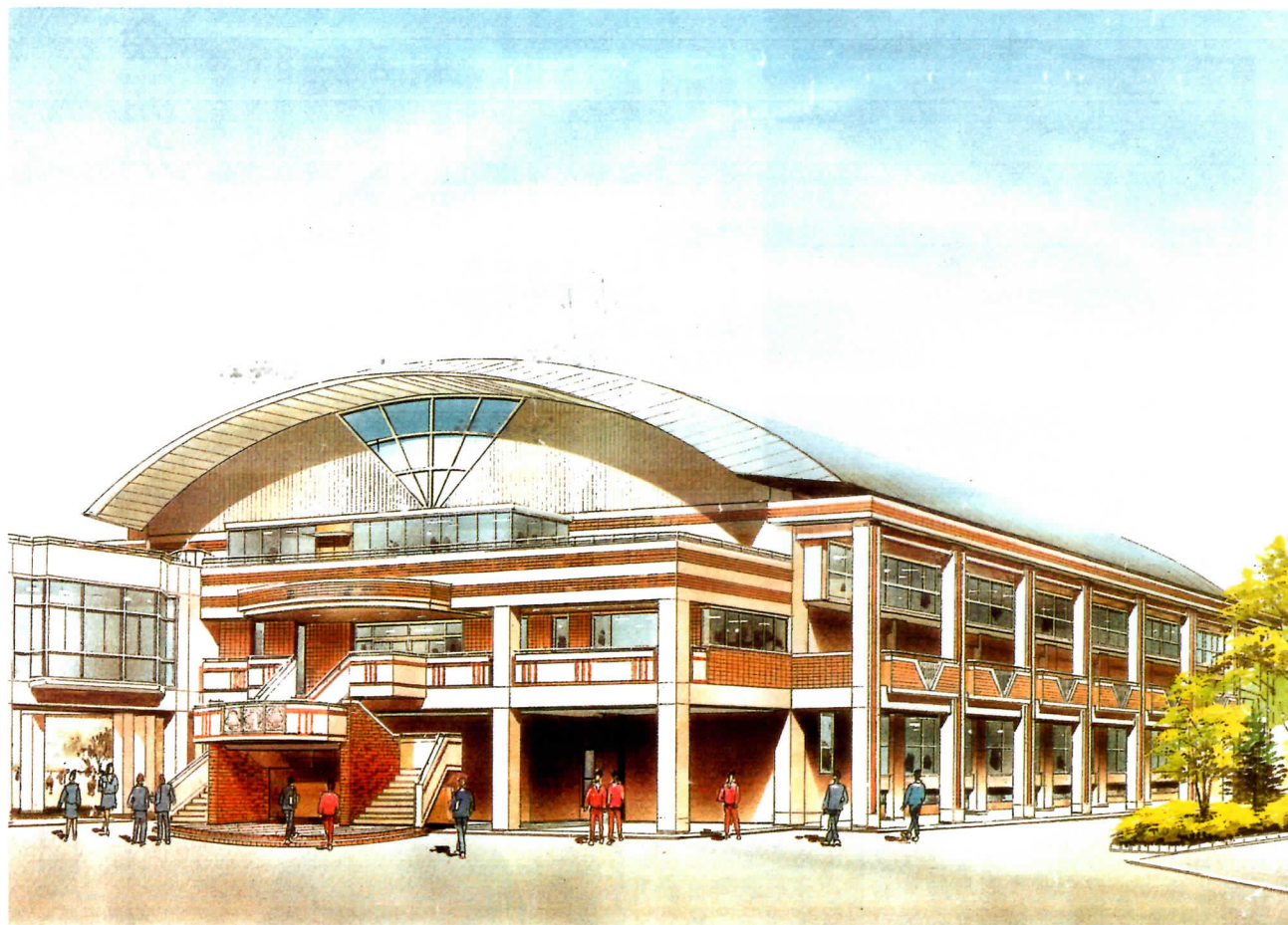


進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 横田尚義 印刷 常陽新聞社



(新築工事が進む体育館の完成予想図)

目次

- 2面 平成14年度総会報告
会長あいさつ
- 3面 学校長あいさつ
- 4面 「若い世代に期待する」
元国土交通事務次官
小幡政人(高15回)
- 5面 恩師を訪ねて⑦
諏訪正次郎先生(昭和25～48年)
- 6面 卒業生レポート⑦
飯塚哲哉(高18回)
- 7面 支部だより
- 8面 お知らせ・お便り
- 9～11面 母校だより
- 12面 平成13年度決算書等

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

- 一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

平成十四年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月十四日(日)、平成十四年度定期総会が、母校体育館にて約三〇〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

まず、応援団の指揮のもと、ブラスパンドの演奏に合わせ、校歌と一高讃歌の斉唱、物故会員に対する黙祷ののち、豊嶋貴副会長・三輪志郎校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長として以下の議事が審議されました。

- 一、平成十三年度事業報告
- 二、平成十三年度決算報告
- 三、進修同窓会旧本館活用委員会の設置の件
- 四、平成十四年度事業計画
- 五、平成十四年度予算

六、同窓会基金報告

(A) 平成十三年度決算
(B) 平成十四年度予算

七、別途積立金報告の件

八、その他

(A) 新体育館建設に伴う備品の件
(B) 推薦会員の件

三号議案では、土浦一高(旧制土浦中学校)に関する資料の収集及び旧本館の活用事業の推進を目的に委員会を新たに設置するというものであります。

八号議案の(A)では、来年早々に完成する新体育館にステージ幕一式を寄贈するというものです。八号議案の(B)では、転校され

た理数科二回生の広瀬勤さんが会員に推薦されました。
十分な審議の後、全議案とも満場一致で可決・承認されました。閉会の後、引き続き母校体育館で恒例の卒業周年祝賀式が開かれました。

本年は、中四十一回(六十周年)、高四・定二回(五十周年)、高十四・定十二回(四十周年)、高二十九・定二十七回(二十五周年)の方々をお招きしました。

祝賀会では、高五回卒で来年五十周年を迎えられる御田寺義也氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、本年五十周年を迎えられた高四回卒本橋道明氏より謝辞が述べられました。

また会場を別に移したの祝賀会では、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。



総会で挨拶する豊嶋副会長



一同で校歌斉唱



総会開始前の会場の様子

同窓会会長あいさつ

—土浦一高の諸君へ—

会長 幡谷 祐一



となつてしまつたのは、本当に残念なことでした。政治家ばかりでなく、国民においても国家としての尊厳、主権という意識が薄れてしまつたことが重大な一因であつたと思つております。国民がさらわれても、何の手出しも口出しもできない国など、世界にも類を見ないと思ひます。

土浦一高はいま、全国的な有名校となり、見学のため教育者が毎日のように来校されていると聞いております。これは、在校生もさることながら、先輩諸兄が学業に専念し、また学校の校訓のごとく、信念をもつて物事を実行し、今日の名声を築き上げてきた結果であると言えます。

我々同窓の者すべてにとつての誇りでもあるのです。と同時に、この誉れを汚すことなく、公私ともに常におのれを律し、国のため、地域社会のため、そして家族のために励まねばならないということでもあると思つております。

学徒諸君には、この伝統と校風を守り、そして一層の向上を目標としていただきたいのです。更に、自分たる勉学にいそむことは、自らの将来を形づくるためだけでなく、親に対する礼でもあることをしっかりと心に刻みつけて、歩み続けていただきたいと願つております。

さて、近頃日本中を沸かせている北朝鮮の拉致問題ですが、この解決が大きく遅れ、衝撃的な結果

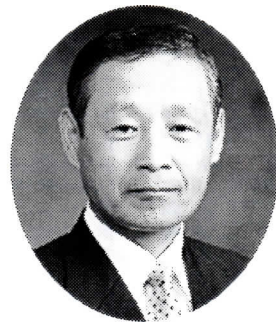
この一つの例をみて、これからの日本を背負つて立つ学徒諸君は、勉学も机上の教科書ばかりではいけないということがよく判るかと思ひます。視野を広くもち、真実を見極める確かな洞察力をもつて物事を見ていただきたいと思ひます。

人を評して文武両道という言葉がよく使われますが、武は身体のみならず心の修養が重要であると考へます。おのれの人格を磨くことに十分に留意してください。

校訓の自主・協同・責任を人生の道標としてしっかりと身につけて、立派な日本人になることを期待いたします。

改革のうねりの中で

学校長 三輪 志郎



桜の古木が紅葉し、旧本館の辺りが一際秋のたたずまいを濃くしております。進修同窓会会員の皆様方には、ますますご健勝のことと拝察しお喜び申し上げます。

皆様の温かいご支援をいただき、創立百五年目を迎えた今年も、本校教育が滞りなく進められますことは誠に有り難く、深く感謝申し上げます。教育は、今、歴史的な改革の中にありますが、断片的ながら本校の近況をお知らせ申し上げます。

まず、学校は、今年度から完全週五日制となりました。授業時間の減少から学力の低下が懸念され、各学校はその対策に苦慮しました。結果的には、県内の多くの高校が補習や土曜日の学校施設の開放をしています。本校では、二年前から五十五分授業を実施して時間確保に努めてきましたが、さらに、今年から土曜日は、三年生が多目的学習館で自主学習を、一・二年生は、教室等での補習を行い、学力の低下防止に努めています。

また、「開かれた学校」づくり推進のために、保護者や地域住民等の意向を把握・反映する「学校

評議員制」が導入されました。今年度から本県は全県立学校に置かれ、本校では五人の方を推薦し県教育委員会から委嘱しました。同窓会からも、第十三回卒業で土浦市在住の堀越昭氏にお願いし、七月十六日に第一回の会議をもち、貴重なご意見をいただきました。

さらに、来年度からは新教育課程が実施されます。「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、生徒の個性を活かし、自ら学び自ら考える等の「生きる力」を育成することを基本的なねらいとし、各学校が実態等にに応じて特色ある教育活動を展開する「総合的な学習の時間」の創設等が特色です。卒業に必要な総修得単位数を現在の八十から七十四単位、必修教科科目の単位数も普通科では、最低三十八から三十一単位になりますが、これに対しても、学力低下を懸念する声が噴出しました。文部科学省からも、宿題・課題を与えることを要請したアピールが出たりして、混乱のスタートとなりました。

本校も「総合的な学習の時間」の内容を本校の実態に合うものとするため鋭意検討を進めています。こうした動きの中、本校は方針としては、進学実績の向上と豊かな人間性の育成を目標に掲げ、伝統の学年主導体制を堅持して、授業の重視・個別指導の徹底・文武両道の奨励・自主性の尊重を努力点として教育に取り組んでいます。

今春の入試は、東大が三十三名と昨年比一人増でしたが、愛知県

の岡崎高校が三十六名と伸びています。しかし、現役だけでは本校二十四名、岡崎二十二名でした。私立では、早稲田九十二名、慶応六十六名、東京理科大学八十六名等が主で、合格者は、国公立二百四名・私立六百六十一名、その他大学校等合わせて総計で八百七十一名で、昨年より三十九名微増の結果です。

生徒の自主活動も活発で、恒例の「一高祭」は六月八日・九日、今年は「和」をテーマに開催されました。その中でも、生徒の発案で、昨年多発テロで犠牲になったニューヨークへ、平和を願い、全校の生徒・教職員と、来校者の協力で千羽鶴を折って届け、それに対してニューヨーク市長から丁寧な礼状が来たのは感激でした。

また、五月に国連本部で初めて開かれた「国連子ども特別総会」に、二年生の小暮倫子君が、NGO「世界の子どものワクチン」を「日本委員会の選んだ三人の中の一人」に選ばれ、政府代表二人と共に参加しました。生徒の目が広く世界に向けられていることに頼もしさを感じます。

その他の行事や四十余の部活動も生徒が主体的に動き成果を挙げているが、今年は、八月に本県で全国高等学校総合体育大会が開催されました。土浦市は、レスリングとヨットの会場となり、本校ヨット部も出場し、部員八人と少ないながらも、全国からの艇に交じり、男女共に健闘しました。

また、運営には、「高校生一人一役活動」の推進が図られ、本校生も、競技運営の補助役員や歓迎のための草花の育成等に取り組み、大会の成功を支えました。

一方、施設面では、昨年十月から建築中の新体育館が外形が完成、内装工事の段階にあり、来年

一月中旬から使用が可能になります。また、定時制の食堂が改装され、内壁の塗装で雰囲気が一変し、一部談話室としても使えるようになり、生徒に喜ばれています。

ただ残念なのは、歴史を刻んできた「理数科」が、現在の三年生が卒業する来春三月で幕を閉じることです。昭和四十四年四月の開校から三十三年の歩みでした。以上が主な近況ですが、進修同窓会の皆様から、今年も多くの支援をいただいております。

一つには、新体育館のステージに絨毯をいただく事であり、こうした付属品は県では作らないため、同窓会の方で寄贈いただくことになりました。図案については、二年生の藤崎佐保里君の作品「楠の詩」に決まり、二月に完成の予定で製作に入っています。

また、本校の誇りである旧本館の更なる活用を図るため、今年から「旧本館活用委員会」を設けて奉仕的に活動いただいております。資料の収集と、保存展示方法を改善し、毎月一回、一般公開日を設けて、委員会の皆さんが交替で説明に当たって下さっています。

さらに、高校総合体育大会に際しては、ヨット部の先輩の方々に連日お世話いただきました。生徒は、輝かしい歴史を持つ先輩方の心・技両面でのご指導に、心を強くしてレースに臨んでいました。

そして、昭和二十年卒業の第四十二回卒業の皆様が「我が青春戦いの中」として回想録を作られ、渡辺光夫氏から関係資料をたくさん頂戴しました。当時の学生生活を物語る貴重なもので、旧本館に保存させていただきます。

こうした多くのご支援に力が大ききを感じますが、今年刊行の名

簿のその重厚な仕上がりに、改めて本校の伝統と、磐石な進修同窓会の姿を見る思いが致します。

社会は正に改革のうねりの中にあります。教育も近年、答申・法改正等のラッシュの様にあります。大学も、国立大の独立法人化や、十月一日の筑波大と図書館情報大等をはじめとして、統合再編が進められます。私立も、大学倒産時代と言われる中で、生き残り

をかける状況にあります。大学院でも、「21世紀COEプログラム」等、競争意識を高める方向にあり、入試の行方も気掛かりです。さらに教育基本法も中教審に諮問され、その結果が目される等、国の改革はまだ当分落ち着きそうにありません。県も、少子化対策としての高校再編整備が必要となり、その推進に努めています。

本校もこの大きなうねりの中で、従来の実績に甘える事なく対処することが大事だと思います。課題は、現役進学率の向上ですが、家庭での学習時間の確保と授業への厳しく真剣な取り組み等、生徒には難関校志望に見合う気力と努力が期待されます。

日本でもH2Aロケットが打上げに成功し、正に夢が世界から宇宙へと広がる時代になりました。今後百年、さまざまな発展と変化が予想される二十一世紀ですが、旧本館前の楠のように構えを大きくとって、それを担い、その中核として夢と希望を持つ国際社会に羽ばたき活躍できる人間の育成を目指して、教職員一丸となって教育に励みたいと考えます。今後とも変わらないご支援・鞭撻をお願い申し上げます。

末筆ながら、進修同窓会のますますの発展と会員の皆様の更なるご健勝を祈念申し上げます。

三輪 志郎

若い世代に期待する

国土交通省顧問
元国土交通事務次官

小幡 政人

高十五回(昭和三十八年卒)



この七月に、三十四年余りの公務員生活にピリオドをうつて、退官しました。

振り返ってみますと、我々の世代は、恵まれた時代を歩んできたようです。つまり、我々の世代には、戦後の復興と、先進国に追いつけ追い越せとの、明確な国家的目標がありました。また、将来をある程度は読むことができ、努力をすればそれだけ報われる良き時代であったと思います。

日本経済は、一度に亘るオイル・ショックを克服して、国民所得はアメリカを抜いて世界のトップになり、ジャパン・アズ・ナンバワンと世界から賞賛されました。

しかし、バブルの崩壊後、目標を失い、日本経済は未曾有の不況に陥っている一方、日本の経済社会の発展を支えてきた種々のシス

こつています。この大転換を目的の当たりにしていると先程の感を一段と強くします。

その恵まれた世代の中で、私自身は、官僚として幾つかの大きな仕事に携わることができましたし、また、幸運にも官僚のトップである事務次官に就くことができました。

これまで、私自身、当たり前のことを当たり前に、ただ誠実にやってきただけのことであり、別に特別のことをした訳ではないと思っています。当たり前のことを自然に行うことが最も大切だと思っています。そこで、私自身の経験から、仕事に対する取り組み方、進め方について少しお話をしてみたいと思います。

仕事を進めるにあたっては、先ず、どうすべきか、どうあるべきか。理念を整理して明確な目標を持つことが必要なのは当然のことですが、この目標を考えるにあたっては、「原点に還って考える」ことが大切です。

例えば、運輸事業は、免許制が採られていたが、これは、戦後、交通需要に対し、供給が格段に少ないという状況のもとで、いかに需要(お客)に公正に応えていくかという観点から採用された制度でした。自由にしていたら、乗車拒否が頻発し、高額な運賃を

取られていたと思います。そのような制度ですから、モータリゼーションが進み、供給が豊富になるとこの制度が機能しなくなることは明白であり、一刻も早く時代に合ったものに変える必要があります。しかし、現実には、運用により凌ごうとしたため、その抜本的改革に時間を要し、残念ながら、時代に合った運輸サービスの育成が遅れてしまったのです。

そして、このような目標を持つに際しては、自分自身の経験、勉強だけでは不十分であることを自覚することが大事です。私の経験からしても、色々な分野の沢山の方々からの情報、アドバイスが如何に大切かを痛感しています。同じ職場の先輩、同僚からのものは当然として、外部からのものがそれにも増して大事だと思っています。

私の地方勤務経験は、沖縄でした。勤務先が国の出先が全て集まった総合事務所でしたので、様々な分野の方々と出会うことができました。他省庁出向経験は、国土庁と内閣でした。国土庁は数多くの省庁からの出向者で成り立つ新しい役所で、かつ、大臣秘書官を務めましたので、全省庁の秘書官と知り合えました。また、内閣では、内閣人事課長として、全省庁の人事課長を相手とする仕事でしたので、幸運にも仕事を通じて霞ヶ関の全省庁の方々と緊密な関係を持つことができました。

一方、外部、すなわち民間の方々と、一つは仕事を通じて知り合った方々。これらの方々は人生の先輩のお年寄りが多く、仕事

のみならず、人生観に亘るアドバイスを頂くこともあります。もう一つは同じ世代の人々。大学時代の友人はもちろん、いわゆる「勉強会」を通じてほぼ全産業の方々と交流しています。これらの方々から貴重な情報、アドバイスを頂きながらより良い目標を立てることができたと感じています。

目標が決まったら、次は、それをどう実現するかです。行政も、事業も、実現して初めて価値を持ちます。行政は、法治行政ですから、行政方針の基本的変更は、法律改正を必要とします。法律案を成立させるためには、業界との調整のほかに、関係省庁、そして与党、場合によっては野党との調整が必要となります。

目標が立派だから簡単に賛同を得られるというものでもありません。それぞれの既存の制度には、歴史があり、そして、現実の利害が複雑に絡んでいます。簡単な処方箋など有り得ません。人間と人間との誠実な付き合いを通して築き上げた信頼関係。時間はかかっててもこれを積み重ねることによって合意に漕ぎ着ける。この方法が結果的には一番効果的であると思いますし、治まりも良いと思います。

日本の社会は、近代化されているようですが実態は結構古く、日本特有の伝統的な手法がかなり通用しています。

例えば、政界では「雑巾がけ」、「汗をかき」、「徳を積む」等の言葉が頻りに耳にします。「あの人

う。」「あの人の折角の依頼だから前向きに考えてみよう。」と言われれば最高です。

このような厚い信頼関係の方を何人持つているか、何人持つことができるかがその人の調整能力(実現力)だと思います。全ての仕事は、特に難しい仕事ほど、たくさんの方々のご理解、ご支援により初めて実現可能となるものと思います。信頼関係を築くためには、相手のことを大事にする、相手の立場に立って考える、つまり、「人を大切にすること」が必要なのは申し上げるまでもありません。

冒頭にお話ししましたように、現在は、十四世紀以来と言われる「時代の大変革期」にあり、新しいシステムの構築が求められています。ぜひ、若い世代の方々が、柔軟な発想をもって、過去のしがらみに捕われることなく、夢と希望を持てる新しい社会の礎を考え、築いていただきたいと思います。

大いに、期待しています。

【略歴】

1945年4月 生まれ
63年3月 土浦一高卒業
68年3月 東京大学法学部卒業
68年4月 運輸省入省
92年6月 大臣官房人事課長
93年8月 内閣参事官(内閣人事課長)
95年6月 航空局監理部長
96年6月 運輸政策局長
97年7月 鉄道局長
99年7月 官房長
01年1月 国土交通審議官
01年7月 国土交通事務次官
02年7月 退官
同右 国土交通省顧問

恩師を訪ねて

⑦

国語諏訪

正次郎先生

(現在七十七歳)

(旧姓百橋)

(在職 昭和二十五年〜四十八年三月)



戦後間もない時代ですから、進路についてはそれぞれの希望に任せていました。従って家業につく者、就職希望者が一クラスできる程でした。昭和三十三年前後、世の中はなべ底景気と言われる不況時代となり、就職クラスを受け持った私は会社訪問に奔走しました。

川崎の工場地帯の濃濁たる煙突の煙は今でも臉に浮かんで来る光景です。

ところが、昭和三十四年になると所得倍増を旗印に池田勇人首相が登場し、世の中は岩戸景気といわれる好況時代がやってきました。

昨年度の「進修同窓会会報」の表紙に旧校舎の正面玄関の写真が掲載されております。昭和二十五年八月、初めてこの玄関の石の階段を踏みました。そこから私の一高教師としての生活がはじまりました。この日学校長の面接があった。大学新卒者ではありませんでしたが、採用決定の確約を頂いたのです。

戦後学制改革で新制高等学校になつていましたが、まだ旧制中学の雰囲気が残っていて、まさに「東国男児の血を享けて」と校歌にあるような面魂の生徒達が、新米教師何するものぞとばかり待ち構える毎日の授業でした。

昭和二十五年四月、新制中学卒の新入生が枝垂れ桜(右記会報写真の左側)のはらはらと散る花片に祝福されながら入学してきました。それは、戦争の苦悩に染まらぬ初々しい少年達でした。

その頃、担当の授業時間は十八時間から二十時間、その上実力不足、晩飯を食べながらの教材研究、それでも何かを教えたい、その一念で充実した毎日でした。

戦後間もない時代ですから、進路についてはそれぞれの希望に任せていました。従って家業につく者、就職希望者が一クラスできる程でした。昭和三十三年前後、世の中はなべ底景気と言われる不況時代となり、就職クラスを受け持った私は会社訪問に奔走しました。

作文指導です。読んで評価するのが大変で、能率化をはかって主題用語などの項目を作り5点法の採点を考えました。総評をつけ生徒に返却した時或る生徒が「先生は私の本当の苦しみを少しも理解してくれないですね。」と泣かれたことがあります。その生徒の文中に込めた訴えを無視して形式ばかりにとらわれた私の評価が誤りだったのです。

110番までは〇〇大学などドラッキング表を作ったりしました。当時は旺文社の模試が全盛で、他に東大模試とか、東北大模試があり、特に東北大の模試は予想的中率は100パーセントに近かったと記憶しています。

古典の授業をしていると、やはり万葉・源氏・徒然草などの故地をこの目で確かめて現実感のある授業がしたいと思ひ万葉・源氏・徒然草の故地を訪ねて歩きました。仁和寺の正面通りに柳泉寺という尼寺があります。その寺にある、兼庵石をちよんこと置いたような兼好法師の墓を見ると「人の亡き跡ばかり悲しきはなし」という一節が浮かんできました。

二十代から四十代まで、長く勤務したので私が土浦一高の卒業生のように思われる方がおりますが、私は実は現在隅田川高校という東京下町の中学出身なのです。浅草六区の映画館と夜店のアセ

代からの書籍があります。文法の授業で或る本質的な疑問が起きた時、それを説明してくれたのは、書棚の一番奥にあった、山田孝雄博士の「日本文学概論」等の書籍でした。だから本校の図書館には貴重な蔵書がたくさんあるので、大切に保存してほしいのです。

私にも冒頭の「一高玄関の石段を上る時、未来の息子が現れて」「この階段を上るのはよしな、もつと別の道があるじゃないか。」と忠告したらまた違った人生が展開していたかもしれない……などと妄想するのは私だけだろうか。

教科外では、時間割係を長い事やりました。今はどうか知りませんが、新学期の時間割を編成する時はすべて試行錯誤法でつくっていくのですから午前二時退勤などという事が毎年つきましました。

現在、進路指導部もやりました。初めて進学要覧を作った、志望校選択の手引きとしました。成績順に欄を設け、例えば1番から

土浦一高勤務も余りに長すぎました。昭和四十八年四月、その年に開校の藤代高校に転動しました。

私は学年主任を命ぜられ、土浦一高型の進学校を目標に頑張りました。

現在、県南地方のホープの高校として頼もしい前進が続いています。

五年後、私はまた転勤を命ぜられ校歌「青青としてしなやかに」ともに伸びよう若竹の」のその竹園高校に移りました。

定年は一に遊び二に遊びの土浦養護学校で天真爛漫の子供達に囲まれて迎えました。

今は二番目に好きな本屋のおやじをやっております。

追記「独り言」

この原稿を書いている間に東野圭吾「トキオ」という小説を読んだ。主人公のトキオと言う息子が主人公の過去の独身時代に現れて無鉄砲な父親を支えて大活躍を演じるという過去と未来が交錯する小説である。

私にも冒頭の「一高玄関の石段を上る時、未来の息子が現れて」「この階段を上るのはよしな、もつと別の道があるじゃないか。」と忠告したらまた違った人生が展開していたかもしれない……などと妄想するのは私だけだろうか。

【略歴】

昭和18年 東京府立第七中学校卒業
(現在、都立隅田川高校)
昭和19年 茨城師範学校入学
在学中兵役 昭和二十年九月復員
昭和22年 卒業
東茨城郡竹原小学校教諭
昭和23年 退職
同年 国学院大学国文科入学
昭和25年 卒業
茨城県立土浦第一高等学校勤務
同年 土浦一高へ転動(竹園高校準備職員)
昭和48年 「藤代高等学校」へ転動
昭和53年 土浦一高へ転動(竹園高校準備職員)
昭和54年 茨城県立竹園高等学校教頭
昭和58年 茨城県立土浦養護学校校長
昭和61年 定年退職

卒業生レポート

⑦

もう一歩前に出てみませんか

日本半導体ベンチャー協会会長
サインエレクトロニクス㈱フアウンダー&CEO

飯塚哲哉

高十八回(昭和四十一年卒)



最近の日朝の拉致問題、中国で起きた亡命者への対応、そして「失われた十余年」と呼ばれる日本経済の動きなどを見ていると、一体我々は何者なんだ、という焦燥感を感じませんか。

東西冷戦が終焉を迎えたといわれる91年以降、世界は「大変革の時代」、「メガコンペティション」という正に激動の時代を幕進してきました。その中で日本は戦後のミラクル・リカバリーと言われた驚異的戦後復興の成功を、まるで全て自分達の実力だったかのような誤解とともに忘れられず、80年代後半から既に始まっていた時代の変調をリードするどころか追従すらできないでいます。これは一体何故なのでしょう。

どうも我々は「臨場感と実行力」を何時の間にか喪失してしまつたようです。男子トイレではないですが、みんなが「もう一歩だけ前に進み出て立てば、朝顔の露は漏らさじ」なのだろうと思っ

あつと言つた間に環境が汚染されてしまつたのです。しかも掃除もしない「本来エリート」達が多いのではないのでしょうか。

1980年の東芝社員時代に、小生は米国のシリコンバレーのヒューレットパッカード社集積回路研究所に一年余り駐在することがあり、人生の転機ともなる大変な衝撃を受けました。米国やアジアの友人達に比べて日本のエンジニアはおかしい。夢を、それも大それたものではなく、身分相應の夢を追うことが許されてないという衝撃を受けて帰国したのである。簡単に言えば、自分の技術で起業するという、彼らにとってはごく普通の夢でも、それを日本で実現

させようとする巨大な障害が立ちちはだかるという現実、つまり日本は、時代が変化するフェーズで致命的に競争力が欠如する国だという認識でした。1981年に帰国しても、やはり日本は大企業の居心地が良いところで、その延長線を走る心地よさは捨てること出来ず、今思えば、日本の半導体黄金期と言われた80年代の十年を東芝でエンジョイしました。

1991年、正直言つてバブル経済による誇大妄想狂の心境に浮かれたこともあつたと思うのですが、前述の「朝顔から漏らさない」ために一歩前に出てみようという気持ちも多少はあつて、自分のキャリアとはおよそ不似合い(当時の日本では高学歴の頭でっかちが起業なんてヒジョーシキ)なベンチャー起業という暴挙?に出たわけでした。

爾来十一年、弊社は昨年八月に店頭上場を果たし、こんな日本でも、一歩だけでも前に出てみると、猛烈に面白くて、しかし実を言ふとかなり辛くて、それでも楽しいキャリアであることが体験できたような気がしています。

弊社の近況の詳細は最近の朝日新聞be八月十号、日経ビジネス九月二十三号、日経産業新聞2002年八月二十一日、七月十一日、二月十五日付などの記事に譲りますが、ここでは何時までたつても新たな悩みに可愛がられている話をしましょう。

企業が三〇四倍に成長するたびに大きな壁に衝突すると言われています。弊社もこの四年間に売上三十六倍の成長を経験し、当然と言えば当然の苦しみを味わっています。企業の健全な成長は人の成長が先行しなければならぬのですが、売上や規模が先行するといろいろな部分に軋みがでます。特に日本は、良い人材は動かさずが生えるまで同じ場所働くべし、という馬鹿げた価値観を持った、先進国では珍しい国ですから、日本には、良い人材を集めた新組織を急成長させにくい風土があります。その辺と戦いながら、長期に安定して成長してゆけるチームを如何に創っていくのか、ということが猛烈に難しい課題です。

二十一世紀は「個と知の時代」だと思っています。かつての土地本位制とムラのような組織体制とが付加価値の源泉という時代ははるか彼方です。如何に世界と伍して、個人の持つ力を完全燃焼させ、その持てる知恵の付加価値を引き出す会社や社会に変化できるかで、競争力が決まる時代なのです。そのためのインフラに貢献できたらと、一昨年、日本半導体ベンチャー協会(JASVA)を組織し、現在百九十の会員を擁しています。日本の大企業にもベンチャーの持つ意義に理解を深めて頂き、日立、NEC、ソニー、東芝、三菱、沖にも賛助会員として支援をして頂いています。

この不思議な先進国日本で、男女を問わず、是非もう一歩前に出てくことをなそう、という仲間が増えてくれたらと念じています。

【略歴】

昭和41年 東京大学入学
昭和45年 同大学卒業
昭和50年 同大学大学院博士課程修了(工学博士)

昭和50年 東京芝浦電気株式会社(現株式会社東芝)入社

昭和56年 ヒューレットパッカード社IC研究所客員研究員

平成2年 東芝半導体技術研究所LSI開発部長

平成3年 ㈱東芝退職

平成4年 ㈱サインマイクロスステム研究所設立、代表取締役

平成5年 東京大学先端研客員教授

平成12年 第十回ニュービジネス大賞「アントレプレナー大賞」

平成13年 JASDAQ市場へサイン社を株式上場

平成14年 EOV(アントレプレナーオブザイヤー)2001JAPANA大賞受賞

平成14年 日経BP社日経ベンチャー誌ベンチャーオブザイヤー2001受賞

【主な著書】

「アナログ・デジタル混載システムLSI」(培風館)

「CMOS超LSIの設計」(培風館)

「Verilog HDL入門」(培風館) など

支部だより

美浦支部

美浦支部の平成十四年度の総会は去る七月六日、阿見町の割烹魚清において開催されました。

市川家正支部長の挨拶に続いて、来賓としてご出席いただいた土浦一高の大山清教頭先生からは、母校の様子、特に東京大学他有名大学に多くの合格者を出していることや、旧校舎の一般開放、体育館に進修同窓会から綴帳の寄付をいただいたことなど母校の現状、将来構想等についてお話をいただきました。

今年度も前美浦村長の市川紀行氏、元美浦農業協同組合長で前支部長の宮本家門氏、前美浦村議会議員の石井延夫氏、元土浦一高教諭の上木幹夫氏外多彩な顔ぶれが出席され、総会後の懇親会は母校の思い出話に花を咲かせ、予定時間をかなりオーバーして、最後には全員で土浦一高の校歌を合唱して閉会となりました。

美浦支部は昭和五十六年十二月、故浜田忠枝氏(中学二十五回卒)のご尽力で設立されました。

浜田忠枝氏は、長く美浦村議会議員を務められ、その間には議会議長として、日本中央競馬会美浦トレーニングセンターの誘致には多大の貢献をされております。その他にも美浦村農業委員会会長外各種の要職を歴任され、昭和六十三年の春の叙勲では地方自治功労者として「勲六等単光旭日章」を授

与されております。

しかし当初は、浜田氏の熱意にもかかわらず、当支部は諸般の事情により目覚ましい活動ができませんでした。

その後、平成五年二月浜田氏が逝去され、その葬儀に集まった有志から浜田氏の遺志を継いで「美浦支部」の再興を図ろうとの気運が盛り上がりました。

そして平成五年七月、元美浦農業協同組合長で浜田氏とともに支部設立にご尽力された宮本家門氏(中学第三十六回)を支部長に戴き、盛大に再発足の総会が阿見町の割烹魚清において開催されました。それから毎年七月の第一日曜日を総会の日と定め、毎年多くの会員が集まり、楽しい交流のひとときを過ごしております。

支部の事業としては毎年「土浦一高進修同窓会 美浦支部だより」を発行し、美浦村在住の進修会員全員に配布しております。今年で第10号となりました。今年度は土浦一高進修同窓会名簿が発行されましたので、美浦支部でも美浦村出身者、美浦村在住者を網羅した「支部会員名簿」を発行する予定で準備を進めております。

更に支部会費を納入された方が逝去された場合には香料をお届けしております。

今年度の総会では美浦村在住の進修会員の親睦ゴルフコンペを今秋頃実施することと決定されました。

(副支部長 小泉幹夫記)

東京支部(東進会)

今年の東進会総会・懇親会は六月一日(日)午後一時から昨年と同じ神田・学士会館で開かれた。

今年は、母校の学園祭が六月第二週の土・日曜日に行われたため、母校の吹奏楽部・応援部の演技を予定していた東進会同窓会は、急遽例年の第二週土曜日から六月一日の日曜日に変更しての開催となった。東京で太鼓を持ち込んで演奏できる会場は、東京プリンスホテルとこの学士会館しかないもので、なかなか日程が合わない。

急な日程変更と日曜日のため出席者が少なくなることが心配されたが、当番幹事の四四年卒一同の努力で、来賓も含めて約一三〇人の出席で、まずまずの盛会だった。

例年どおり総会は、植木満会長の挨拶、小職の活動報告、決算予算の承認、齋藤勝教頭の母校の近況報告および大曾根進修同窓会副会長の近況報告のあと、アトラクションとして、母校の吹奏楽部の演奏と応援部の演技が披露され、万場の拍手を浴びた。大応援旗のもと、母校の校歌、応援歌が披露されると、出席者一同、わが青春時代を回想して感激の面持ち。吹奏楽部の演奏は、みんなが知っているポピュラーな曲目を選んでいった。

今年度は、水戸一高と日立一高の東京支部との交流の一環として、両支部の幹



平成十五年度

進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日 平成十五年四月十三日(日)

午後一時

二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年	中四十二回
卒業五十周年	高五回 定三回
卒業四十周年	高十五回 定十三回
卒業二十五周年	高三十回 定二十八回

一般会員・周年記念会員の数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

事長を招待した。小職も既に両支部の総会に招待されて、同窓会の運営について大変参考になった。

(理事長 大野金一記)

土浦支部新役員決まる

進修同窓会土浦支部では、平成十三年十二月二十日、市内「霞月楼」において役員会を開催し、再任の豊嶋支部長以下、次の新役員を選出した。

支部長 豊嶋 貢氏(中三八回)
副支部長 青山和義氏(高八回)
幹事長 堀越恒夫氏(高一九回)
会計監事 黒田善文氏(高二一回)

『進修百年』

(B5版一、〇九一頁)

—土浦中学・土浦一高 百年のあゆみ—

価格三、五〇〇円

(送料別)

お問い合わせ

土浦一高

〇二九八(二二)〇一三七

土浦一高ホームページ
アドレス

<http://www.net-lbaraki.ne.jp/kou-055>

お知らせ
お便り

卒業四十周年同窓会

地球温暖化が異常気象か？桜がすっかり散ってしまった四月十四日、母校進修同窓会総会が体育館で開催された。そこには卒業四十周年を祝って招かれた我々第十四回卒業生達の懐かしい顔々が一集団をなしていた。

ところで、私達は前日、ゴルフを楽しんだグループと、筑波山江戸屋ホテルで集合し大宴会を催した。そこで、須田直之・大竹勉・中山守の三人の恩師先生を囲み昔話に花を咲かせたのが、母校の庭の桜を補って余りあるものであったと自画自賛。

本来なら江戸屋を我が物顔に大酒を飲む予定であったが、幸か不幸か同日同時刻、卒業五十周年・高四回つまり十年前先輩と鉢合わせ、長幼の序を厳しく教え込まれた私達は先輩達を敬遠しながら一夜をすごした。而して我が同窓にも老け型があり、先輩方にもフサフサありで廊下で会ってもアレ？彼は何組だったかなという感じもしないわけではなかった。

明るくする十四日、いよいよ本番の式典、祝賀会を迎えたわけであるが総会式典はともかく、祝賀会では人数・元氣さとも五十周年の先輩・二十五周年の後輩を大きく凌駕できたと思う。

ここに総会資料に掲載された謝辞を載せ、ミスプリントを訂正しておく必要がある。

謝辞

本日は平成十四年度進修（資料では「先週」）同窓会に御招待いただき、卒業四十周年を迎えた私達に丁寧な祝辞・記念品を賜り心から御礼申し上げます。



第14回卒業同窓会

私達が母校土浦一高に入学いたしましたのは、昭和三十四年の春でありました。当時を思い起こせば、戦後の傷もようやく癒され、電気冷蔵庫・電気洗濯機、そしてテレビが三種の神器といわれておりました。卒業の年、昭和三十七年は「スーダラ節」が大流行。これは無責任、安請け合い快進撃の時代のムードを反映したものであったと思います。

考えてみますと、私達は日本の二十世紀の歴史の中で最も恵まれた時期に高校生活を送らせていただいたのではないかと、と今さらながら懐かしさ感謝の気持ちで一杯であります。

あれから四十年、夢のような心地がいたします。あの校舎は国指定の重要文化財として今日も尚、天を指して屹立しております。あの校舎で青春時代を送った私達も仲間の人々も鬼籍には入り、我々も白髪が目立ち、あるいは残り少ない髪を気にしたり、話題の中心は孫や自分の健康問題となりまして。その四十年の間に日本の高度経済成長も終焉となり、新たに迎えた二十

一世紀も先の見えない不安が広がっているような気がいたします。

この間私達は何かを失いつつあるのではないのでしょうか。「衣食足りて礼節を知る」古来よりの文化の謂であります。又、「物で榮えて心で滅ぶ」とも聞かされていた私達であります。これらは皆高校時代に恩師先生よりご指導いただいた筈であります。我々それぞれが深く学ばなかったツケが回ってきたのではないかと、とも思います。それが今、初老を迎えながら母校の校舎を見た時、改めて教えられたような思いであります。かつて学んだ青春時代を心の糧として、またこれからは第二の青春時代とこそえよ！との強いメッセージが校舎や先生方から送られます。そんな進修同窓会と母校のますますのご発展を祈り感謝のことは代えさせていただきます。

(文責 説田太郎)

卒業二十五周年同窓会

去る四月十四日(日曜日)、平成十四年度進修同窓会総会及び記念式典が開催され、私たち第二十九回卒業生は、卒業二十五周年記念学年としてご招待を受けました。

二十五年の時を経て、旧友と再会する喜びに胸を躍らせ、会場となる懐かしい体育館へ行ってみると、二十五年の時の流れが逆戻りしたかのように入、見覚えのある面々が目に入りまして。「変わらないな」とお互いに言葉交わしながら、再会を心の底から喜び合いました。式典では、現役応援団のリードによる校歌斉唱に自分たちも加わるなど、とても感動的な時間を過ごしました。

その後、当日四時より、土浦京成ホテルにおいて、同窓会を開催いたしました。安達先生を始め八人の先生方にお越しいただき、お話を頂戴いたしました。一高時代の教室で授業を受けている光景が目に入り、改めて先生方の素晴らしい素晴らしさを感じました。同窓生も百二十人以上集まりました。特に気になったのは、女性の方々が皆若々しく、以前と変わらなかつた点です。男性諸氏の中には、誰なのか分からなくなつてしまった人もいたので、特にそう感じたのかも知れません。



第29回卒業同窓会

一次会、二次会とあつたという間に過ぎてしまい、懐かしい旧友たちとしみじみ話すには短かすぎました。とても貴重な時間となりました。さらに三次会、四次会と、夜が更けるのも忘れて語り合った人々もいたそうです。

最後になりますが、このような機会を作っていただいた関係の皆様から感謝申し上げますと共に、母校土浦一高の益々のご発展を祈念いたしまして、お礼の言葉とさせていただきます。(文責 島岡宏明)

卒業56年振りに修学旅行実現

旧制中学45回(昭和20年卒)の卒業生が、戦争の最中で実施できなかった「修学旅行」を実現させた。

平成13年11月7日から一泊二日の日程で実施され、卒業生25名の参加があつた。熱海市内に宿泊し、恩師

である和田隆先生(青山学院大学名誉教授)による「校外授業」も行われた。

「旧本館活用委員会」発足

国の重要文化財に指定されている旧本館は、長い歳月が培ってきた伝統校の風格を今に伝えて、再来年には竣工百周年を迎えます。

この本校の歴史が凝縮されている文化財を、単に維持・管理していくだけでなく、有効に活用することがこの建物の価値をより高めるものと思います。

こうした活用を積極的に推し進めるため、学校と同窓会が一体となった組織を立ち上げ、「旧本館活用委員会」が四月の同窓会総会で承認されました。

活用委員会は元本校校長で同窓会副会長の大曾根安亮氏(高四回)を委員長に、学校の教職員数名と同窓生有志(主に元本校国語科・社会科教員及び会員)数名で構成され、毎月第一・第三火曜日を充てて活動を開始しました。

活用委員会の主な仕事は、旧本館の一般公開への対応(毎月第一土曜日に実施)と資料展示室の整備及び資料のデータベース化などですが、今年度はこれまでに定期的な一般公開と、資料の紫外線による劣化を防ぐための遮光ブラインドの設置や資料展示室の増設などを行ってきました。

今後の主な活動予定としては、校舎竣工百周年に向けての準備と資料収集の推進を考えています。お手持ちの資料提供など会員各位のご協力をお願いいたします。

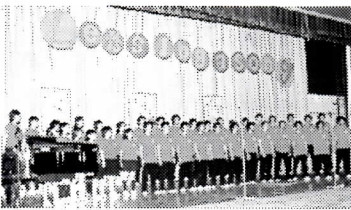
(文責 飯村弘、高五回)

母校だより

第五十五回一高祭 — 伝統と進化和を求めて —

一高祭実行委員長 大野 順子

第五十五回一高祭が六月の六、八、九日と二日半にわたり開催されました。今年はテーマを「和」、キャッチフレーズを「カラフル大噴火」として文化祭実行委員一同、昨年七月から地道に準備を積み重ねてきました。今となつては「最高の文化祭だった!」という達成感にあふれています。しかし振り返ってみれば、準備の過程でいろいろなかことがありました。これまでの一高祭で育まれてきた伝統も引き継ぎながら、さらなる進化を求めるといふことは、誇りであると同時に大きなプレッシャーともなります。より良い「企画づくり(一高祭創り)」のために一つ一つの企画についてじっくり話し合い、時には意見をぶつけ合いながら納得のいく結論を求めていきました。また週休二日制のため文化祭の日程を調整するのが難しかったり、校内装飾の統一性とテーマのかかわりを根本から考えていったり等と、大変でしたがやりがいがありました。このようにゆつくりとではあるけれど着実に準備を進めていった過程で生徒達の間で団結力(「和」)が高まり、それが最終的には「カラフル大噴火」という言葉どおりに一高生が持っている全エネルギーを出し切った輝かしい文化祭にすることが出来ました。



Let's sing a song

文化祭当日は天候にも恵まれ、大勢の方が来校して下さいました。新しい試みとして一般公開の前に雰囲気づくりのため行われた

開祭式では現在世界で起きている紛争をテーマにして平「和」について考える劇を上演してみました。また、体育館でのミュージカルの上演や吹奏楽の演奏、赤レンガの広場でのユーモアに富みストーリー性豊かなM・S・Q・U・A・R・E(クラス劇)や、知的好奇心を刺激するデパート大会、すっかり旧校舎のある風景にマッチしたアリーナでのど自慢は大好評のうちには終わりました。また一高祭名物であるゲートも、今年は装飾が細部まで丁寧な施された和風建築物が造られ、来校者の賞賛を浴びていました。このほかにも委員会やクラスでたくさん企画が行われ、充実した一高祭となりました。

このように、第五十五回一高祭は一高生一人一人が豊かな個性を最大限に発揮し、それらが調和することであつたパワフルとなり、また伝統を生みだすという素晴らしいものになりました。このように文化祭が成功を収めることが出来たのも、ひとえに私たちの活動を温かく見守ってくださった諸先生方、保護者の方々のおかげです。全校生徒を代表して、この場

す。素晴らしいものをつくりあげてくれることを、そして一高祭の更なる発展を心より祈っております。

第三十五回一高オリンピック

一高オリンピック実行委員長 小松原正彦



最後に、手際良く独創性あふれるアイデアを出してくれた実行委員、しおりの表紙に迫りある絵を描いてくれたり、当日得意の筆で賞状を書いた、後輩達が次の一高祭のために動きだしている。

第三十四回歩く会

歩く会実行委員長 住谷 昌仲



「今年は時間ないから」担当の先生の最初の一言、この時が私の難難辛苦の山越えの旅路の始まりでした。時は三月、私はまだ一年の道標を歩んでいました。

「今年は時間ないから」担当の先生の最初の一言、この時が私の難難辛苦の山越えの旅路の始まりでした。時は三月、私はまだ一年の道標を歩んでいました。高校総体、完全週休二日制などが冒頭の言葉の理由でしょう。その上、今年のコースは、高浜く霞ヶ浦一高です。定刻内に全員到着したことが無い日付付きのコースです。今年の実施日は平日、定時制授業のため、最後尾の到着は四時半前に済まされねばなりません。山の彼方の幸いを訪ねてみようとしたこの仕事、どうやら幸いはそう近くには無いようです。それから、水の如く流れる毎日でした。一つ問題を解決するとまた新たな問題が発生します。そんな毎日の生活の中、もしかしたら己の人生、流れる水に文字を書く、そんな無駄なものではなかったかと、思った日もありました。当日、空は蒼く、吹き抜ける風は言葉を消して空へと帰るが如く素晴らしい天気にも恵まれました。また、最後尾も無事に時間通りに到着できました。これも偏に実行委員、生徒の皆さん、そして諸先生方の協力の賜物でございます。ありがとうございました。

あつたと感じております。「歩く会」は楽しかったですか?」その答えが「花」なのでしよう。

共宿を終えて

共同宿泊学習実行委員長 春日和明

夏休みの終盤、八月二十六日から三日間、僕達は日光霧降高原キャンプ場で共同宿泊学習を行いました。共宿は高校生活のなかでも特に思い出に残るものだとも聞き、共宿委員は張り切ってそれぞれの仕事に取り組んできました。共宿は、一日目に各クラスが企画した体験学習、二日目は周辺のハイキング、三日目は日光市内見学で、その間五食分は自ら作るという盛り沢山の内容でした。なかでも多くの人はほとんど自炊したことがないので、食事作りは不安の種でした。そのため、現地できちんと作れるように、先生方の協力も仰いで、各班の献立を確認しました。冷蔵庫もガス台も無い所での調理がいかに大変か実感し、自分達の生活を省みることが出来たと思います。

また、一日中友人達と共にいることで、お互いの理解もかなり深まりました。通常の学校生活で、こんなに長い時間話すことはないのに、全員普段交流の無い人を知り良い機会になったのではないかと思います。

先生方やキャンプ場の管理人の方などのおかげもあり、各クラスとも、十分に楽しみ、三日間を有意義に過ごすことができました。当初の目的もあつた共宿を三年間の大きな思い出にするということも達成できたと思っております。共宿によって、学校生活がより良くなったと思います。

職員室だより

数学科

全日制数学科は、十三年度末の人事異動もなく以下十一名の中年精鋭から構成されています。十二年度末に学年主任を終えてストレスから解放され、庶務部長として悠々自適の生活を送る飯嶋良夫。飯嶋学年の副主任終了後学年を引き受けて、新世紀生徒の学力向上対策に暗中模索、奮闘中の第二学年主任宮川茂(高25)。得意で大好きな女生徒教育に専念したい気持ちを抑えながら学年全体の指導に力を注ぐ第一学年主任鈴木千尋。

二G担任兼生徒指導副部長として生徒会関係を担当し、せわしない日々を送っているはずながら、その素振りを見せない中川功一(高26)。性に合わない事務処理や雑務に追われながら、三月の受験成果に思いを馳せる第三学年副主任浜野義一(高28)。コンピュータ室副室長としてプログラミングやデータ処理に携われると共に、最後の理数科三E担任として活躍する袖山博。各種時間割編成と北海道旅行のスペシャリスト、教務副部長兼一日担任増山道靖。コンピュータ整備士兼数学科職員室のリフォーマー、二日担任鈴木浩二。読売ジャイアンツとコンピュータをこよなく愛する数学科主任研究員、一C担任柏正則。三年前の指導結果に不満を残し、リベンジに執念を燃やす三F担任菊池紳一郎。二十一世紀枠で本校二度目の甲子園出場をねらう野球部長酒井貴美(高34)。以上の職員が本校教育発展のため日々研鑽を積んでいます。

英語科

英語科職員は全十一名で、一年生は、桜井(高27)―第一学年副主任―、原(高32、内地留学中)、宮本、香西、二年生は、倉持、足達、根本、三年生は、川崎(高23)―教務主任―、笹目(高24)―第一学年主任―、松本、日向(高36)が担当しています。

職員室は、本棟と特別棟をつなぐ二階渡り廊下沿いにあり、本校では貴重な二名の女性の先生方の御陰で、落ち着いてリベラルな雰囲気になっていきます。ただ、生徒の噂に耳を貸すと、職員室のドアを開ける時に、一番尻込みするのが英語科だそうです。英字新聞に目を落とす者、問題作成のためパソコンの画面から目を離さない者、単語テストの採点でひたすら赤ペン握る者、教材研究のため絶えず時間に追われている者、各々が各々の目的に従って、忙しく立ち働いている様を想像してもらえればいいでしょう。

通常、学年担当者は、一年生、二年生、三年生と持ち上がるものが多く、教材の選定から試験問題の検討に至るまで、生徒の知的好奇心を刺激する授業の在り方を探って、担当者間で綿密な議論が交わされます。生徒自身も英語という教科に特別な関心を寄せる者が多く、その期待に応え、広く世界で活躍する人材を育て上げようと、英語科は一つになって慌しい日々を送っています。

部活動だより

弓道部

二年 辻 尚宏
私たち弓道部は、三年生が引退した今、男子十四人、女子十四人の計二十八人で門井先生と杉山先生の指導の下、県大会優勝を目標とし、日々精進しています。

春に行われた県南大会では、県高校を破ることが出来ました。惜しくも優勝は逃したものの、第三位という結果を残すことが出来ました。しかし、その後の県大会では惨敗してしまいました。「なぜ勝つことができなかったのか。」私たちは考えに考え、その結果、「精神力」という点において、あまりにも未熟であった、ということに気付きました。

新チームとなり、まず始めた事は、部の改革でした。常に緊迫した雰囲気練習するために、私語厳禁、時間厳守、練習の内容の大幅見直しなどを行い、「正射必中」の理念の下、精神力強化に励んできました。その結果、早くもその成果が出始め、先日行われた秋季大会では、個人戦において県大会優勝をなしとげることができました。この姿勢を崩さず、より精神を磨き、次回の新人戦では団体戦においても優勝をねらっていきます。

冬が近づくにつれ、寒さとの戦いともなり、現在よりもさらに厳しい練習となっていますが、これも精神の修行です。私たちはさらなる飛躍を目指して、がんばりたいと思っています。これから応援よろしくお願ひ致します。

写真部

二年 阿部 彩穂

広い会場の中に撮影からプリントまでの全てを私自身で行った写真が展示してあるのを見た時、達成感と嬉しさが込められてきた。写真の現像は気温に左右される。冬の寒い日にはヒーターで現像液の液温を上げ、夏の暑い日には凍らせたペットボトルで液温を下げる。この作業を怠ると何も作れなくなる。当然、今回の作品もそうして作られた。さらに、大会用の写真はサイズがとて大きいので、プリントも大変だった。けれど、私が味わった達成感と嬉しさはそんな苦労を全て忘れさせて「自分の力は何かを生み出せる」という自信を私に持たせた。この自信は私のこれから人生を大きく飛躍させるにちがいない。



全国総合文化祭美術展写真の部出品作品

頑張る高校生

世界に目を向けて

「国連子ども特別総会」

二年 小暮 倫子

今年の五月、私はニューヨークの国連本部で開催された「子ども特別総会」という会議に出席しました。この会議は、「子どもの権利条約」を批准している国々が今までの約十年間を振り返るとともに、今後の行動計画を話し合う会議で、また十八歳未満の子どもがそれに参加するというのはじめての公式な国際会議でもありました。

日本からは政府と民間のNGOからそれぞれ二名の子どもが参加しました。私はNGOから参加した一人で、去年、発展途上の国々にワクチンを送っているNGO団体の一般公募に応募し、作文と面接の結果選ばれたのでした。

私が主に話し合いに参加したのは、総会前に三日間開かれた「子どもフォーラム」というユニセフ主催のイベントでした。これは、総会に提出する子どもたちの声をまとめた文書を作成するためのフォーラムでした。「教育」や「児童搾取」、「子どもの社会参画」などいくつかのテーマに分かれ、子どもたちの立場から大人たちに自分たちの現状を訴え、改善していくにはどうしたらよいかを話し合いました。会議ではとても積極的な議論が行われ、各国の子どもたち一人一人が、しっかりと自分の意見と高い知識を持っていることに驚かされました。英語が堪能でない私は自分の考えを伝えられるかはじめてとても緊張していましたが(案の定あまり通じませんでした)が、みんなとても明るく楽しい人たちで、最後は言語を超えてある一つの目標のために心を一つにすることができたような気がしています。

今回の体験で、私は将来に向けて夢を大きく膨らませることができました。もちろん遠くの夢ばかりを見て日頃の学習や受験の壁から現実逃避してはいけません。目標を見据えてこそ、それら乗り越える力が湧いてくるように思います。十二月には、再びアジア地域での会議が韓国で予定されています。一高での一日一日を大切に、実りある高校生活を送りたいと思っています。

平成十四年度入試報告

更なる飛躍を

進路指導部

平成十四年度入試では、東大三(新卒二四名)が合格しました。東大合格者は三年連続で三〇の台に乗せ、全国公立高中第二位であります。京都大に八名(新卒三名)、一橋大八名(新卒五名)、東工大一三名(新卒九名)の合格を出したことは、本校生の難関大志向に一層の道筋をつけるものとして賞賛に値します。さらに筑波大医学専門学群の四名を含めた国立大医学部合格者数一七名という数字も昨年を上回る立派な実績であります。

私大の方では慶応大六六名(新卒四四名)、早稲田大九二名(新卒四三名)、上智大三〇名(新卒二〇名)、東京理科大八六名(新卒三〇名)の合格者を出した健闘しました。特に慶応大の数字が光ります。国立大合格者の総数では二〇四名(新卒一二四名)にとどまりましたが、内容的に大変充実した数字であると言えます。私立大等を加えた合格者の総数は八七一名(新卒四一六名)で、五月一日現在、新卒生の進学者数は前年比四名増の一九六名となっております。

これまで指摘されてきた難関大志向の傾向は今年も顕著で東大・京都大・一橋大・東北・東工・筑波大の受験数が全体の七割近くを占めています。

難関国立大を第一志望として他

は受験しないか、私立大併願をするが、早稲田・慶応・上智あたり以外では合格しても進学しない、という構図が徹底してきています。進学者数の増加が困難な状況になっていきます。

展望の見えるく、慢性不況の中、世は挙げて浪人回避へと動きつつある中で本校は多数浪人の傾向です。一年くらい浪人しても第一志望を貫徹した方がよいという判断が根拠になっていきます。したがって、本校生が希望する難関国立大や有力私大により多くの合格者を出すためには一層の実力の涵養が必要となります。

週五日制、五教科七科目問題、新教育課程実施、大学の独立行政法人への移行など入試環境も激動の時代を迎え、進路指導も正念場となります。心して当たらねばならないと決意を新たにしております。

過年度卒生の方は一七三名のうち、一四七名が進学しました。東大・京都大・東工大・一橋大・東北大・筑波大・早稲田大・慶応大および国立大医学部などへ多くの合格者が出ていて、雌伏一年の苦労が偲ばれますが、すべてが第一志望を貫徹出来たわけではありません。むしろ、第二の策として主要私大を併願し、合格できた所に入學するという現実的組み立てを実行している者が多くなっています。

本校生が志を高く保ち、果敢に難関大受験に挑戦し、合格していくのは大変喜ばしい限りですが、希望に見合う実力養成という厳しい試験に直面しているのは否めない事実であります。

平成14年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

大 学	合格者	新 卒
北 海 道 大	13	7
東 北 大	22	15
茨 城 大	7	4
筑 波 大	36	23
千 葉 大	6	5
お茶の水大	3	3
東 京 大	33	24
東京外語大	5	3
東 工 大	13	9
一 橋 大	8	5
横 浜 国 大	1	1
名 古 屋 大	2	
京 都 大	8	3
旭 川 医 科 大	1	
弘 前 大	2	
埼 玉 大	2	1
電 気 通 信 大	1	
東京医科歯科大	2	2
東 京 学 芸 大	1	
新 潟 大	3	2

大 学	合格者	新 卒
鹿 児 島 大	1	
高 知 医 大	1	1
信 州 大	4	1
大 阪 大	2	1
岡 山 大	1	
九 州 大	4	2
東 京 芸 大	1	
愛 媛 大	2	
東京農工大	4	2
静 岡 大	3	2
国立大計	192	116
茨城県立医療	5	4
東京都立大	2	1
福島県立医大	1	1
名古屋市立大	1	1
公立大計	12	8
防 衛 大	2	1
防 衛 医 科	2	1
大学校等計	4	2
国立短大計	2	1
私立短大計	2	1

大 学	合格者	新 卒
青 山 学 院 大	20	12
学 習 院 大	13	5
慶 応 大	66	44
国 際 基 督 大	4	3
上 智 大	30	20
中 央 大	40	16
津 田 塾 大	5	4
東京女子大	16	10
東京理科大	86	30
日 本 女 子 大	7	4
明 治 大	50	21
立 教 大	35	23
早 稲 田 大	92	43
法 政 大	20	9
同 志 社 大	7	1
立 命 館 大	18	2
日 本 大	18	5
東京電機大	6	1
私立大計	661	289
合格者総計	871	416

進修同窓会会務分担 (平成14年度)

1. 本部

担当	本 部 役 員	学 校	主 な 業 務
総務	豊 嶋 木島 説田 小野(慶) 谷中	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	青 山 小野(治) 石川 渡辺 柴沼 小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	横 田 木島 谷中 堀越 宇田川 宇田 鈴木(志) 鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会報の編集・発行
名簿	大曾根 梅澤 小網 柳沢 野村 草薙 小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	横 田 大曾根 桜 井 谷中 野村	教頭 校内幹事	事務局と相互連携
監事	平田 田嶋		本会会計の監査

2. 支部

支部会等に際して、本部に対し出席要請がある場合は、会長又は下記の副会長のうち1名が、校長（または代理）とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りでない。

豊嶋、横田、大曾根、青山、中川、植木、幡谷(浩)、桜井

3. 進修同窓会校内幹事

高24 笹日 俊夫(英語) 高26 中川 功一(数学) 高31 飯竹 修(理科)
高36 日向 久(英語) 谷口 俊秀(事務室長) 秋田 剛(係長)

進修同窓会基金管理委員会

進修同窓会会長 幡 谷 祐 一 (中40回)

委 員 11名

進修同窓会副会長 4名 豊嶋 貴 (中37回)

横田 尚義 (中44回)

大曾根宏亮 (高4回)

桜井 光孝 (定4回)

全日制教頭 1名 齋藤 勝 (高15回)

事務室長 1名 谷口 俊秀

その他 5名 青山 和義 (高8回) 副会長

三輪 志郎 (高13回) 校長

木島 幸夫 (高1回) 本部幹事

谷中 良雄 (高12回) 本部幹事

野村 ルナ (高15回) 本部幹事

監 事 2名 平田 公敏 (併中2回)

田嶋 栄吉 (高11回)

平成13年度 進修同窓会決算書

収 入 額 一金 26,112,864円也
支 出 額 一金 14,347,215円也
差引残高 一金 11,765,649円也

【収入】

項 目	予算額	決算額	比較増減	備 考
1 繰 越 金	11,771,435	11,771,435	0	前年度繰越金
2 終 身 会 費	100,000	30,000	△70,000	1名
3 年 会 費	7,000,000	11,576,000	4,576,000	3,564名他
4 入 会 金	1,930,000	1,990,000	60,000	新会員金・定396名×5,000円、 臨時入会1名
5 寄 付 金	0	743,216	743,216	下記に記載
6 雑 収 入	792	2,213	1,421	預金利息
合 計	20,802,227	26,112,864	5,310,637	
ご寄付者名	高1回 根本隆雄ご家族より、卒業25周年同窓生一同、中27回卒同窓会一同、高42回 太田好一様ご家族より			

単位：円

【支出】

項 目	予算額	決算額	残 額	備 考
1 総 会 補 助	700,000	680,110	19,890	資料、会場設営外
2 会 報 発 行 費	4,000,000	3,325,870	674,130	会報印刷代、送料
3 通 信 費	300,000	26,780	273,220	切手、はがき代
4 卒業記念品費	200,000	160,800	39,200	卒業証書用筒代
5 卒業60、50、40、25周年記念品費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品
6 会 議 費	500,000	181,119	318,881	
7 支 部 連 絡 費	300,000	200,000	100,000	支部会補助
8 生徒奨励費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助
9 別 途 積 立 金	6,000,000	6,000,000	0	積立会計へ
10 慶 弔 費	100,000	0	100,000	
11 事 務 局 費	1,000,000	398,316	601,684	サラト事務処理費他
12 日本館管理補助費	300,000	296,420	3,580	
13 予 備 費	5,802,227	1,477,800	4,324,427	卒業周年記念品作成補助
合 計	20,802,227	14,347,215	6,455,012	

上記のとおり決算しました。

※項目間の流用を認める。

平成14年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成14年3月31日

監事 平田 公敏 印

監事 田嶋 栄吉 印

「会員名簿」の発行と
取り扱いに関するお願い

本会では五年ごとに、同窓生相互の連繫並びに、各分野でご活躍の母校関係者の、さらなる発展等を祈念し、会員名簿を発刊しておりますが、プライバシー・漏洩等に配慮し、取り扱いには細心の注意をお願いいたします。

また、学校名、個人名、あるいは業者名を名乗り、名簿作成を口実に、電話による住所、電話番号等を問い合わせる事例があるようです。学校、同窓会では、電話での問い合わせは一切しておりませんので、併せてご注意願います。

会費納入の
ご協力とお願い

平成十三年度の会費納入状況は、三月末現在、三、五六四名の皆様から、一、六〇六、〇〇〇円を頂きました。
今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

澄んだ秋空を背景にして、建設中の新体育館がその威容を呈しています。平成十五年一月の竣工が予定され、その外観はほぼ完成の姿を見せております。やがて取り壊される現体育館に対して惜別の感を禁じ得ない方々も多数とは思いますが、新体育館の完成とともに、土浦一高がさらなる前進・発展を遂げるよう期待したいと思えます。

本59号の編集にあたり、各方面の方々のご協力をいただき、貴重な原稿や写真をお寄せいただきました。厚くお礼申し上げます。今後とも進修同窓会をよりよくお願い申し上げます。

進修同窓会会報第59号
発行日 平成十四年十一月一日
会報編集委員会

編集委員長 横田尚義
編集委員 木島幸夫 谷中良雄
堀越博 鈴木志郎

校内

齋藤 勝 鈴木淳一
宇田邦利 飯竹 修
中川 功一
日向 久